11/21 まいど！倫々号です。
今日金口の神様が大社の稲佐の浜からいらっしゃいます。
出雲地方は旅行客で
ホテル、旅館の空がないそうです。
有難いことです。
幸せ運がアボーン

今週の倫理　952号　2015.11.21 ～11.27

十一月のテーマ　文化と経営

鬼才が守った伝統文化

え・古屋智子

一　昨年、「おもてなし」という言葉が流行語大賞に選ばれました。これは二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピック招致のためのプレゼンテーションで、滝川クリステル氏が発した言葉です。「お・も・て・な・し」という言葉とお辞儀のジェスチャーは、世界中の人々に、好印象を与えたのではないでしょうか。

「おもてなし」は、日本人の精神を象徴した言葉の一つです。日本には、先人たちが大切にしてきた精神が長い歴史の中で育まれ、洗練され、今に息づいています。

ところが、今から七十年前、日本は占領下に置かれ、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）により、教育をはじめ、様々な分野が規制・監視された時期がありました。その規制の対象は、伝統文化の一つである「将棋」にまで及ぼうとしていたのです。

ある日、GHQから将棋界の代表者に出頭が命じられます。呼び出されたのは、独創的な指し手、キャラクター、数々の逸話で知られる、将棋界の鬼才・升田幸三棋士でした。

軍服を着た四、五人と通訳一人に対し、日本側は升田棋士一人です。やがて質問が始まりました。

「日本の将棋は、取った相手の駒を自分の兵隊として使用する。これは捕虜の虐待であり、人道に反するものではないか」

ここを突いてくるだろうと覚悟していた升田棋士は、次のように答えました。

「日本の将棋は、捕虜を虐待も虐殺もしない。つねに全部の駒が生きておる。これは能力を尊重し、それぞれに働き場所を与えようという思想である。しかも、敵から味方に移ってきても、金は金、飛車なら飛車と、元の官位のままで仕事をさせる。これこそ本当の民主主義ではないか」（升田幸三自伝『名人に香車を引いた男』中公文庫より）

一連のやり取りが五、六時間続き、将棋は守られたのでした。

将棋の歴史を辿ると、古代インドのチャトランガ（ボードゲームの一種）を起源とし、西に流れてチェスに、東に流れて将棋となった、という説が有力です。

インドから中国を経て、日本に伝わり、長い歴史の中で独自の発展を遂げ、「駒の再使用」というルールが生まれました。升田棋士は、そうした将棋の伝統に潜む日本文化の本質を理解し、強い自負心を持っていたからこそ、堂々と主張することができたのでしょう。

倫理研究所では、会員が心にとどめ、目標として向かうべき事柄として、次のような「信条」を掲げています。

「我等は、日本文化の本質を明らかにし、世界の文化を摂取して、生活の向上に努めます」

日本には先人から受け継がれてきたたくさんの伝統が存在します。将棋のように、海外から伝わり、日本独自の文化として変容したものもあります。

歴史の中でさまざまな試練を乗り越え、磨かれ、紡がれた日本文化の本質を認識し、尊ぶところから「生活の向上」の一歩は始まるのでしょう。